神戸商大新聞

発行所
神戸商科大学
学生新聞編集局
神戸市垂水区西垂水町
電話(垂水) 2144 2145

笠岳遭難特集

商大山岳部遭難（岐阜県笠ケ岳）

必死の捜索空し
福谷君は絶望

昨年十二月二十六日、岐阜県吉城郡笠ケ岳第三尾根を登山中の本学山岳部パーティ一行九名は笠ケ岳から槍ケ岳縦走の計画のもとに昨年十二月二十日神戸を出発し、岐阜県下笠ケ岳に向った。二行のうち渦水孜明君（二回）は尿の負傷のため、アタック前に神戸へ帰り、残る八名は五名と三名の二パーティに分れて行動することになった。第一パーティは浜崎勝司君（三回）をリーダーに、馬場脇行君（三回）、中野道治君（二回）、福谷弘君（一回）、迫田英夫君（一回）の五人で、比較的やすいといわれる第三尾根を、また第二パーティは中川隆嗣君（四回）をリーダーとし、吉川隆一君（二回）および高島忠雄君（二回）の三名で編成、第四尾根を、それぞれ登頂し、肩の小屋でおち会う予定であった。彼らのその後の行動および遭難後の救援隊の行動は次の通りである。

七人共生死不明、対策本部に暗い影

【十二月二十七日】第一パーティの中野君は「ナダレにあいあとの四人の行くえがわからない。」と中崎山荘へ重傷の身をひきずりながら救助を求めてきたのはこの日の正午ごろであった。

「商大山岳部遭難」の報をうけた地元県警及び北飛山岳会の救援隊約四十名は、ただちに現場付近を偵察したが猛吹雪のため捜索できなかった。

午後一時ごろ、山岳部O・Bの小野威氏（神戸市生田区下山手通三丁目、日本物産専務）のもとにこのニュースがとどき、救援対策本部が同物産内に設けられた。同本部には阪本学長、伊賀山岳部長、加地学生部長ら多数関係者が集まり、対策を協議した結果、午後八時二十九分神戸発急行〝筑紫〟で第一次救援隊として十三名（現役七名、O・B六名）が現地へ向うことになった。一方、同友会総行部は二回にわたり特別熱行委員会をひらき、状況を検討するとともに体育会の協力を得て、対策本部の指揮下で活動することを決定した。

【二十八日】前日神戸を出発した第二次救援隊は早朝現地に到着し、午前十時頃前進隊が穴毛小屋に入った。午後、中崎山荘に現地の捜索本部を設け今後の方針を協議した。この日は、その後もつづくナダレと猛吹雪に加えてガスの発生で二重遭難の恐れがあるため、捜索はかどらなかった。

神戸の対策本部では、教授、O・B、学生が一心同体となって救援物資の受入れや現地との情報連絡・記録などの仕事に大わらわ。夜には神戸から第五次救援隊としてO・B五名が出発した。

【三十一日】前日同様捜索隊出ず。

【一月一日】現地での陸上捜索がはかどらぬため、神戸の救援対策本部では飛行機による捜索を考え、朝日新聞および自衛隊に依頼した。

中川隊生還

【二日】未明、第一パーティ同様生死を気づかわれていた第二パーティ（リーダー中川君）の三名無事生還。このため捜索はナダレに遭遇した第一パーティだけにしぼられ、地上捜索と並行して、朝日新聞社「あさかぜ」と自衛隊機二機が空からの偵察を行ったがまったく手がかりはなかった。

【三日】昨日夜、帰った中野君の話で、〝ひょっとしたら〟という淡い期待を抱いて救援隊は扇の小屋に到着したが四人が立ち寄った形跡はなかった。またこの日も自衛隊機は空からの捜索に協力したが空しかった。このため、四人は殆んど絶望と見なされるに至った。

【四日】いよいよ明日で捜索を打切ることに決め、救助本部を中崎山荘からふもとの槍見温泉に移す。

第一パーティも生還

【五日】最後の望みを託して、捜索隊は穴毛谷一帯、クリヤ谷そして方が一の可能性を考慮して笠谷まで捜索したが、すべて徒労に終った。六時半、断腸の思いで捜索は一応打切りと決定。その直後、絶望と見なされていた第一パーティ浜崎、馬場、迫田の三君が生還したのである。

浜崎君らの話によると、第一パーティは第二パーティの中川君らと別れて二十二日、ベースキャンプ（A）を出発、Bでデポ（途中、食糧などを分散しておいていくことと）し、Aへ引返した。翌二十三日には再びAを出てCで第二回目のデポを行いAへ戻った。二十四、五日はDに三度目のデポを行った後にEの突起のうしろにアドヴァンス・キャンプを設けた。そして二十六日にX点に達した時、浜崎、馬場の両君が三人を残し、ザイルを使って頂上偵察に行った。それから三十分程後（午後三時ごろ）長さ約四十メートルのナダレが起り、下を見て立っていた三人のうち福谷、中野の両君がおそわれた。中野君は自力で脱出に成功、付近を捜したが吹雪のため分らず全員遭難したものと思い、重傷の身をひきずりながら翌二十七日中崎山荘に急を告げたのである。一方、浜崎君らは下で助けを求めていた迫田君と三人でナダレにのまれた中野君と福谷君を探したが、これも吹雪のため視界がきかず、単独での捜索は困難となり、三十日までEのテントにとじこめられ、天候の回復を待ったが三十一日には天気がやや回復したのでクリヤ頭から約一時間四十分戻った笠谷へ下りる尾根についた。四日までそこでビバーク（臨時露営）した。五日は誤まって笠谷へ下りたが迷ったと気づいて再び稜線まで上り、そこで入れ違いに笠谷を捜索した救援隊のラッセルの跡を発見し、それをたどって槍見温泉に帰還したのであった。この知らせに現地も神戸の本部もわき返ったが、一人帰らぬ福谷君を思うとさすがにどこかに一抹のかげが漂よっていた。なお、浜崎君らは、中野君が自力でナダレから脱出し中崎山荘にたどりついたことは、生還してからはじめて知ったと言っている。

福谷君の捜索続く

【六日・七日】ただ一人生死の分らない福谷君の無事を祈って必死の捜索は続行された。しかし、そのかいもなく、七日午後、捜索隊員の極度の疲労と悪天候とのため一応捜索は打切られ翌日を待つことになった。捜索隊員は午後十一時四十分ごろ全員帰神した。

福谷君の捜索五・六月が

敏援対策本部の発表によると、福谷弘君（一回）の捜索予定は次の通りである。

二・三・四月は、雪の状態偵察のため、一ケ月、二・三回ずつ少数の偵察隊を送る。雪融けを待って、本格的な捜索隊を現地へ派遣して、遺体の発見に努めるが、それは、五月または六月になる模様。

事件の渦の中から

山岳部の遭難事件も、三人の生還者が無事神戸駅に着くのを見てホッとさせられたところである。しかしまだ冷い雪の中に一人の学友の生命がとり残されていると思えばなにかさびしい気がする。

この事件は、山岳部員は言うに及ばず私達一般学生にも多くのことを教えている。その中で気にかかった一つのことがある。

一月九日付の毎日新聞は、「山の事故は災害ではない！」という見出しで、生還者の神戸駅到着の様子を伝えている。その中に「一時は絶望視されただけに家族は飛びあがらんばかりの喜びよう。本当によかった。よかった！だが神戸駅で出迎える家族、ガールフレンドなどに姿を見せた生還者は、やあ……と手をあげてなかば英雄気取りで」と皮肉めいた言葉が目につく。

生還者が英雄気取りであったかどうかは知らない。又そうした気持も理解できないものでもない。しかし、この新聞は、生還したという自分の喜びよりも以前に、自分達の引き起した問題、また困難を辛抱強くたえぬいたという忍耐力が称えられる以前に、遭難の起きた原因等に反省がなされるならば、生還者が英雄気取りになれる筈がないと言うのである。その通り。しかし私達は、今、マスコミがこうした批判めいたことを言うこと事態に一つの矛盾を感じないでおれない。

なぜなら、

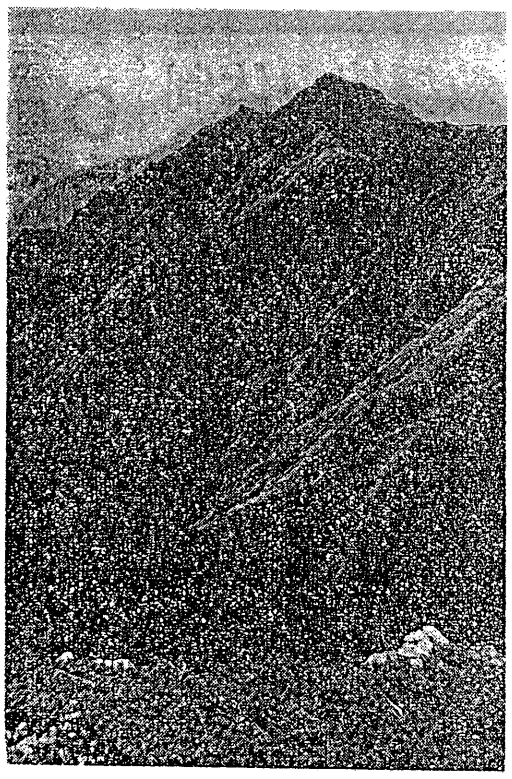
遭難生起以来、各報導関係はこの事件をどのように取り扱ったか。生命という枠を飛び越えて、如何に興味本位に人間が扱われていたかは、遭難者の家族が一番よく知っていることであろう。事実の確認もなしに、大きく、はなばなしく書きまくられた新聞記事は、生還者と家族との対面をいっそう劇的にさせはしたものの、不明となった学友の父兄の心をどれほど痛めつけたことであろうか。また、生還が確認された時、いちはやく堂々たる見出しで生還者を英雄的に報導したのは誰れであったのか。

遭難対策本部に情報を集めに来る報導関係者のフラッシュは遠慮もなく人々の目を痛めつける。本部の学生、先生方まで役者に仕立てて「顔を上げて下さい。立って地図をもって下さい」と指示までする。おそらくこうした調子で出来たのが、生還者が笠ケ岳で笑っている写真ではなかろうか。一人の学友を残して笑える筈がない。しかし笑っている。「はい、笑って下さい」と泡田首相のインタビューと間違ったのかもしれない。

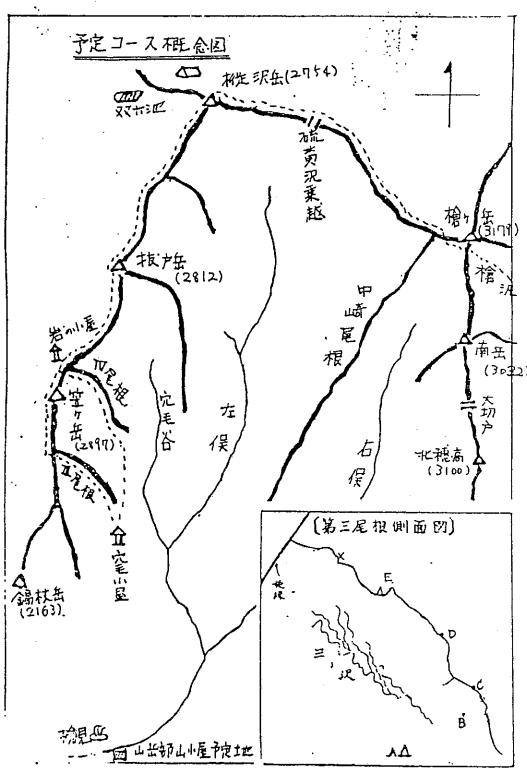
七日の神戸駅では、新聞、放送関係の記者が、山岳部員をとりかこみ、フラッシュとテレビの撮影でスターなみの歓迎である。

マス・コミが組み立てた筋書の中で踊った役者が悪いのではない。ただ、一つの職業意識から生命を一つの石ころ同然に取扱うマス・コミに材料を提供するような失敗がいけなかったのだ。我々は今後このこと を心する必要がある。と同時に、事件の解決をすみやかに運んでくれる筈のマス・コミがむしろ逆にそれを遅らす結果になる場合さえあることを私達は考える必要があるのではなかろうか。

（T・M）



（写真説明）
前列左から、一人目高島君、二人目福谷君、四人目迫田君、中列左から、二人目中川君、三人目馬場君、後列左端浜崎君、四人目伊賀部長、五人目清水君、六人目中野君、右端吉川君



商大山岳部史

【昭和4年】部員十名の参加の下に発足。

【昭和7年】蜂谷氏（当時三回生）奥穂高・滝谷において遭難、商大山岳部史上初めての遭難。蜂谷氏は乗鞍―錫杖岳―槍平小屋―滝谷―明神岳―徳本峠の予定で単独行を試みたが滝谷で遭難。

【昭和9年】七月台湾北部中央山脈縦走に成功。又北海道日高山系・幌尻岳鳥跡破に成功、以上二つの成功は山岳部史に一大エポックを作る。

【昭和14年】七月北岳附近において遊難により二部員死亡。夏合宿は北岳バットレス登はんを目標に行なわれたが、非常に稀な落雷によって中村・朝田部員を失う事実上山岳部活動は停止。

【昭和16年】攻部当局の指令により、学友会各部は解散。

【昭和22年】山岳部の組織は再編成された。

【昭和27年】十月北穂高において二部員秋雨のため凍死。秋合宿穂高―槍縦走の予定であった。涸沢からキレットに向う途中、北穂小屋を出た所で秋雨にみまわれ凍死。

【昭和32年】部の再建をはかり、部活動極めて活ぼっとなる。槍―剣縦走に成功。

【昭和35年】五月春山合宿穂高滝谷において中川（三回）ピッケルで腹部重傷、中野（二回）足に裂傷を負う。十二月北アルプス笠ケ岳において雪崩により遭難、一名絶望。

注目に値する O・Bと現役との関係

今回の商大山岳部遭難事件は、第一パーティのうち三人は奇蹟的に生還したものの、福谷君は絶望という惨事に終った。

我々は、これに対して、遺憾の意を表明すると共に、建設的な批判を行わなければならない。

この事件において、不幸中の幸とでも言うべきことは、救援活動への各方面からの協力体制が、非常に緊密だったことである。

我々はこのことを考察することによって、この事件を何らかの形で商大各サークル活動にプラスの影響を与えるよう努力すべきであろう。

緊密な救援協力体制
遭難対策

O・Bの大半が捜索隊へ
一時は三十余人も

山岳部冬山合宿は、昨年十二月二十日から開始された。

しかし笠ケ岳第三尾根登攀中、中野・福谷両君が、ナダレにさらわれ、中野君は、ナダレにさらわれ、中野君は、ナダレから奇蹟的には い出した。重傷を負いながらも、二十七日正午頃、中崎山荘へ急報。連絡を受けた増田卿二君（四回）は、直ちに寺本氏（山岳部O・B）へ。直ちに生田区下山手通三丁目、日本物産内に遭難対策本部を置き、山岳部顧問伊賀助教授をはじめ、同O・B小野氏（日本物産専務）らが中心となって救援対策を練った。東京など各地からO・Bが続々かけつけた。現地では岐阜県警及び地元の北飛山岳救助隊員ら四十五名から成る救助隊が、捜索に当っていた。遭難対策本部は、山岳O・B五人と神戸に残っていた現役八人から成る第一次捜索隊を組織し、捜索隊は二十七日二十時二十九分、現地へ向けて出発した。

五次まで救援隊を

次いで、第二・三次と五次まで救援隊が編成され現地へ向った が、その間、六十余人の山岳部O・B中、大半が私事を顧みず、捜索隊に加わった。商大体育、文化各部で、先輩との結びつきの等閑視が問題とされている その中にあって、山岳部現役とO・Bとの密接な関係は、山岳部独特の性格という面があるにしても、改めて考慮される余地が存在するのではあるまいか。現地捜索隊へのO・Bの参加人員は、多い時には、三十人を越えたという。

また、遭難救援対策への協力関係は、山岳部だけでなく、同友会、ワンゲル部、体育会、学校当局、県関係当局、更には、朝日新聞社、自衛隊など、あらゆる方面から、密接に展開された。

学生側一致して協力

まず、学生側からは、遭難の通報を受けた二十七日午後、同友会、ワンゲル、体育会が、救援対策本部へ協力を申し出た。同友会は五千円をとりあえず、カンパし、二十八日伊賀部長が、現地救援隊の指揮のため、出発したあと、対策本部へ常時詰めて、連絡係に当り、ワンゲル、体育会と共に遭難対策活動に協力した。

同友会で資金カンパ

また同友会では、遭難対策諸活動に要した費用に協力する意味で、学生内への、百円資金カンパを行う模様である。我々としても、自発的な部の勤労を決めた山岳部の今後の発展、ひいては、学園の発展を望む立場から建設的な批判の目をむけると同時に、出来る限り、遭難対策資金援助に協力すべきではあるまいか。

捜索機が生還の希望を

学校当局も、遭難受報後、遭難対策協議会を置いて、遭難対策費として四十万円を立て替えた。

また、阪本学長は直ちに、阪本県知事及び松永県教育課長を通じて、伊丹の自衛隊機の救援活動参加を要請、自衛隊機二機の出動許可を得た。また、朝日新聞社も、笠臣写真撮影予定機への便乗を快諾し、山岳部O・B河野氏、小野氏らが、それぞれ乗り組み、小牧、松本を基地として、上空から、第一パーティー三人を捜索した。この爆音を聞いて、浜崎君ら三人は、生還の望みを持ちつづけ、慎重に行動したという。捜索機に向って、青い布きれを振ったが、発見されなかった。しかし、飛行機の爆音が、パーティを元気づけたのは確かだとのこと。また、朝日新聞社からは、現地捜索隊にハンディ・トーキー（無線電話機）の利用が許可され、それによって捜索活動が機動性を増したという。

例えば、飛行機と中崎小屋連絡本部との交信が可能になったり、輪かんじきの跡を発見した捜索隊に、ハンディー・トーキーを使って、捜索の一晩延長を指令したりが大きい。彼らは、飛行機の爆音によって、希望を得、また、二重遭難を恐れて止める警察を説得し、猛ぶぶきをついて、捜索隊がつけたラッセル跡をたどって帰ってきた。

欲しい先輩との協力

特に山岳部O・Bと現役との関係は、正に兄弟に等しい。山岳部では、毎年、現役と先輩とその家族とで アニュアル・キャンプという交歓会を開くそうだ。商大各サークルの活発化を行うには、先輩と現役との親密化が必要ではないか。

福谷君（一回）は、絶望視され、山岳部に対する反省を促がす声も聞かれる。現在のところ、福谷君をのみ込んだナダレの原因は、不明だが、山岳部の合宿計画そのものに無理はなかったか。我々は今回の遭難を遺憾に思うと同時に、建設的な意見を試みなければならない。

批判より忠告を……
～伊賀部長談～

例えばナダレの原因についても、それが家族から隊へ伝えられるというような話でしたが、登山に対してですが、報道に際しては家族の考慮を考えてほしいということ。私達の行動を"無謀"という言葉で批判する人々に対して私達がむしろ望むのは、一つのテクニックの問題ではなく、活動の途中で雑音を入れないでほしい。

今度の捜索では、当初、地元警察が天候の理由で捜索隊の出発を禁止したので、少数で偵察に出かけたところに、特に苦心がありました。学校、O・B、部、それに新聞社が一体となってつくり出した協力体制は立派だったと思います。何か英雄気取りな風があるというリーダー達への非難については、否定できないでしょう。

特に感じたことと言えば、まず雪の状態を全国的に報道できるような材料を示してほしいということです。今年の冬は一般にたいへんな大雪で、地元でも五年ぶりだというような話でしたが、登山ムに対してはできるだけ家族の考慮を成功させるために綿密な計画をたてるうえには、もっと科学的で正確なデータが必要ではないかと思います。次に、私達の欠如を考えないで批判しないでほしいということ。私達の行動を"無謀"という言葉で批判する人々に対して私達がむしろ望むのは、一つのテクニックの問題ではなく、活動の途中で雑音を入れないでほしい。

今度の捜索では、当初、地元警察が天候の理由で捜索隊の出発を禁止したので、少数で偵察に出かけたところに、特に苦心がありました。学校、O・B、部、それに新聞社が一体となってつくり出した協力体制は立派だったと思います。何か英雄気取りな風があるというリーダー達への非難については、否定できないでしょう。

特に感じたことと言えば、まず雪の状態を全国的に報道できるような材料を示してほしいということです。今年の冬は一般にたいへんな大雪で、地元でも五年ぶりだというような話でしたが、登山ムに対してですが、報道に際しては家族の考慮を考えてほしいということ。私達の行動を"無謀"という言葉で批判する人々に対して私達がむしろ望むのは、一つのテクニックの問題ではなく、活動の途中で雑音を入れないでほしい。

写真は神戸の対策本部

トピック

寝言に呼ぶ友の名

一月五日夜頃第一パーティーの浜崎・馬場・迫田君が檜見温泉へ奇跡の生還をした。精魂を使いはたした体を横たえ、ぐっすりとねむったのである。三君の側に付添っていたK氏（山岳部O・B）はねごとを聞いた。

「どっついセッピやなあ」

「中野……福谷……」

自分達が生きるために越えなければならない巨大なセッピ。彼等には大きな恐怖が目の底に焼きつけられているのだろう。又寄宿に会い目前にない中野・福谷両君を探し求めた数日間。幾度となく呼んだその名は無意識の世界においてもなお躍動してるのだろう。

四日目の小屋捜索隊がクリヤ谷の深い新雪 を途中まで ラッセルし、飛行機から捜索の結果「二の小屋には何もいないことが判明した」との報道により引き返したのである。その時休息を取った所に少量の〝おかき〟をこぼした。一方浜崎・馬場・迫田の第一パーティーは、中野・福谷君の姿をみつけることができすクリヤ谷を通り檜見温泉へと おりる予 定であったしかし途中笠谷へまよい込んだ。その後一つのラッセルの跡をみつけた。しかしラッセル跡を追うことは非常に危険である。というのは〝ラウンド・ワン デリング〟といって自分の足跡を追って堂々めぐりをし、遂に力つきてしまうことが数多くあるのである。しかし今度の場合、自分達の持っていないおかきが落ちていたので、ラッセル跡は自分達のものでなく、捜索隊のものであるという確信をえて、それを追って檜見温泉にたどりついたのである。〝おかき〟は命の恩人？といったところ。

〝冬山の鉄則〟守る
三人の生還は当然

北アルプス笠ケ岳における本学山岳部の遭難事件は、七日の捜索打切りで一応幕切れとなった。この遭難事件は周知のごとくあらゆる報 道機 関によってとりあげられ、社会的にも大きな反響をまき起した。遭 難それ自体については、計画や技術の面で少なからず世間から手きびしい批 難をうけた。この事実は今後本学山岳部の発展のためにも深く心に銘記しなければならないだろう。しかし、遭難後彼らのとった行動に関しては山岳専門家もまことに適切であったと評している。このことはひとり山岳界のみならず、われわれの人生にとっても貴重な資料となろう。

「禍い転じて福となる」ということわざがあるが、この場合にもあてはめてよかろう。

専門家たちの ことばを 借りれば、彼らは〝冬山の鉄則〟を徹底して守りぬいたのだ。ただ、オーソドックスにことを運んだのである。このオーソドックスにということが容易なようであって実は非常に困難なことなのである。しかも今度の場合のように、〝死〟に直面して十日余、オーソドックスに徹しきったということはわれわれとしても大いに学ばねばならぬところがあると思う。

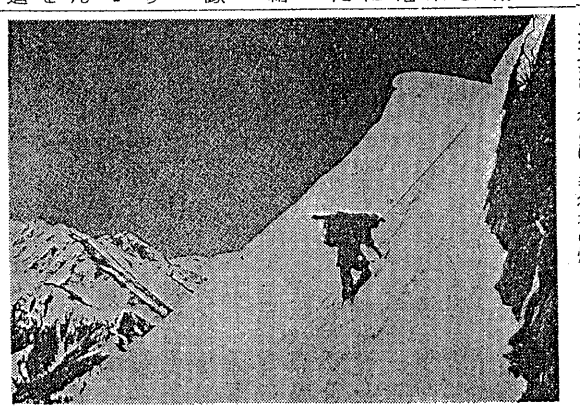
適確な判断と行動

第一パーティを例にとれば、中野君と福谷君がナダレにまきこまれた後、残った三人は盟友の生死を気づかい、危険をおかして捜索した。しかし悪天候と悪い積雪状態とを考慮して一応単 独捜索をやめ、この事故を一刻も早く知らせに下りようとした。その後四日間は猛吹雪のためテントで待機し天候の回 復を 待ってから行動を起した。ところが、第三尾根を下りることは再び自分たちもナダレにあう危険があったので、夏登山の道がついているクリヤ谷へ向った。そこで彼らは誤って笠谷の方へ下りてしまったのだが、迷ったことを知った時まったく冷静に一応後続線までひき返し、捜索隊の残したラッセルを見つけたのだ。

これらの行動はすべて山の常識として当然のことのように思えるが、それを怠ったために死に至った例は数え切れぬほどである。浜崎リーダー以下三人の沈着なそして臨機応変な行動に加えるに日頃の訓練によってきたえられたすばらしい体力、そして食糧や装備がナダレからまぬがれたこと、これらが相まって三人の生還一決して奇跡でも何でもなかったのだがーが実現されえたのである。

救援対策費に八十万円

救援対策本部によると、救援対策費見積の総額 八十余万円。うち、四十万円が既支払額。うち二十万円を大学側が、十万円を〇・Bが、立て替えている。残額十万円は地元救援隊への借とのこと。なお八十万円には、今春の福谷君捜索費予定分も含まれている。



越中沢岳附近にて、山岳部誌「稜線」から

橋泰来
（山岳部顧問）

このたび部が引起した事故によって、各方面に多大の迷惑をおかけしたことを、顧問として申訳なく思っている。殊にわれわれの学園から福谷君の姿を永遠に失った一事にいたっては、痛恨これに勝るものはない。

わたしたちは、遺体捜索の責任をなお今後に残してはいるものの、とにかくも現在の段階に迄で事態をかなり円滑に収拾することが出来たのは、大学当局、山岳部OB、同友会諸君が昼夜を分たず文字どおり献身的な努力を尽したこと、関係諸方面の好意ある協力を得たお蔭であって、この 感激をわたしは終生忘れることが出来ない。

今度の遭難に対しては、学園の内でも外でも、さまざまな角度からの批判がすでに加えられているし、なお将来 も加えら れるだろうが、計画や技術の面で少なからず発展のためにも深く心に銘記しなければならないだろう。しかし、遭難後彼らのとった行動に関しては山岳専門家もまことに適切であったと評している。このことはひとり山岳界のみならず、われわれの人生にとっても貴重な資料となろう。

「禍い転じて福となる」ということわざがあるが、この場合にもあてはめてよかろう。

専門家たちの ことばを 借りれば、彼らは〝冬山の鉄則〟を徹底して守りぬいたのだ。ただ、オーソドックスにことを運んだのである。このオーソドックスにということが容易なようであって実は非常に困難なことなのである。しかも今度の場合のように、〝死〟に直面して十日余、オーソドックスに徹しきったということはわれわれとしても大いに学ばねばならぬところがあると思う。

適確な判断と行動

第一パーティを例にとれば、中野君と福谷君がナダレにまきこまれた後、残った三人は盟友の生死を気づかい、危険をおかして捜索した。しかし悪天候と悪い積雪状態とを考慮して一応単 独捜索をやめ、この事故を一刻も早く知らせに下りようとした。その後四日間は猛吹雪のためテントで待機し天候の回 復を 待ってから行動を起した。ところが、第三尾根を下りることは再び自分たちもナダレにあう危険があったので、夏登山の道がついているクリヤ谷へ向った。そこで彼らは誤って笠谷の方へ下りてしまったのだが、迷ったことを知った時まったく冷静に一応後続線までひき返し、捜索隊の残したラッセルを見つけたのだ。

これらの行動はすべて山の常識として当然のことのように思えるが、それを怠ったために死に至った例は数え切れぬほどである。浜崎リーダー以下三人の沈着なそして臨機応変な行動に加えるに日頃の訓練によってきたえられたすばらしい体力、そして食糧や装備がナダレからまぬがれたこと、これらが相まって三人の生還一決して奇跡でも何でもなかったのだがーが実現されえたのである。

救援対策費に八十万円

救援対策本部によると、救援対策費見積の総額 八十余万円。うち、四十万円が既支払額。うち二十万円を大学側が、十万円を〇・Bが、立て替えている。残額十万円は地元救援隊への借とのこと。なお八十万円には、今春の福谷君捜索費予定分も含まれている。

橋泰来
（山岳部顧問）

このたび部が引起した事故によって、各方面に多大の迷惑をおかけしたことを、顧問として申訳なく思っている。殊にわれわれの学園から福谷君の姿を永遠に失った一事にいたっては、痛恨これに勝るものはない。

わたしたちは、遺体捜索の責任をなお今後に残してはいるものの、とにかくも現在の段階に迄で事態をかなり円滑に収拾することが出来たのは、大学当局、山岳部OB、同友会諸君が昼夜を分たず文字どおり献身的な努力を尽したこと、関係諸方面の好意ある協力を得たお蔭であって、この 感激をわたしは終生忘れることが出来ない。

今度の遭難に対しては、学園の内でも外でも、さまざまな角度からの批判がすでに加えられているし、なお将来 も加えら れるだろう。